

# 小学校国語科における文学の授業の研究 ～「生」と「死」をモチーフとした教材を通して～

学籍番号 229305

氏名 小出真由

主指導教員 成實朋子

副指導教員 岩田文昭

## 1. 研究動機・目的

人間として誕生したからには避けることのできない事象が「死」である。だが「死」が身近なものとならない限り、遠い未来とも感じられる「死」を積極的に考えようとする人は多くないだろう。これは、「死」自体が忌み事として敬遠されていることも理由の一つといえる。

国語科の授業に目を移すと、国語教科書の中に「死」が描かれた物語は多い。ほとんどの学年で、少なくとも1つは教材として掲載されている。子どもたちにとっては、この物語の中に登場する「死」こそが、「死」というものとの出会いであり、「死」について学ぶためのよい機会となるのではないだろうか。

本研究では、小学校第6学年の子どもたちを対象に、「生」と「死」をモチーフとした教材として谷川俊太郎「生きる」と今西祐行「ヒロシマのうた」を選択し、実践した。

## 2. 小学校国語教科書における「死」

小学校国語教科書に掲載されている「死」をモチーフとした作品は、散文の物語・文学教材の約20%～30%を占めている。これらの教材における「死」について、その内容で分けるとおおよそ、①主要な登場人物の死、②動物（ペット）の死、③戦争にまつわる死、④伝記における死、⑤主人公の行動を変容させる死、⑥その他（様々な要素を含む）という6つに分類できる。

このうち、「死」を扱った教材としては③戦争にまつわる死が件数として最も多いのであるが、これら戦争児童文学と呼ばれるような作品の中でも、今西祐行「ヒロシマのうた」は亡くなった人々の姿そのものを詳細に描いているという点で他の作品とは異なる部分がある。

### 3. 「生」と「死」をモチーフとした教材の実践① ～谷川俊太郎「生きる」の実践～

この詩は、連ごとに何が書かれているのかが、いずれも平易な言葉で書かれており、書かれている内容を理解することは、それほど難しいとは言い難い。ただ、詩という形で言葉を連ね、今生きていることを実感する詩人の意図に気付くことは難しいのではないかと考える。そこで、子どもたちが詩人の立場を意識するような問いかけを行い、創作者としての詩人の存在に気付かせながら読むということを意図として授業づくりを行った。

子どもたちの様子を見てみると、詩の解釈という点ではある程度目標が達成できたと感じている。詩の創作においても、意図をもって創作に取り組むことができている、子どもたちの中で、創作者という存在を意識できているようであった。

### 4. 「生」と「死」をモチーフとした教材の実践② ～今西祐行「ヒロシマのうた」の実践～

この実践においては、筆者が意図したことは、第一に「わたし」の視点から物語を読み考えることで、何をどのように書いているのか表現に注目し、遠い昔の出来事である戦争を描いた物語であっても、自分事として考えることができるようになるということである。第二には、戦争児童文学を読む時に陥りがちな「原爆はいけない」という「パターン化された読み」からの脱却のため、「わたし」がなぜ、そのように書いたのかということに着目しながら考えることもねらいとした。

子どもたちの様子を見る限りにおいて、以上のねらいは、ある程度達成できた。子どもたちは「わたし」という視点に着目しながら、作者の意図を踏まえて物語を読み、考えることができるようになっていた。

その一方で、「原爆はいけない」という「パターン化された読み」から十分に脱却することはできなかった。「わたし」という視点に寄り添い、この惨状を伝えたいのだということに思いを馳せることはできていても、「わたし」がなぜ、そう思ったのかということについては、それ以上深く考察するには至らなかったのである。

## 5. 研究の成果と課題、展望

本研究実践においては、このように深い読みに至る入口のところまで、子どもたちの読みが、ごく自然に到達しえたということの評価しておきたい。そして深く読むことの面白さを子どもたちに気付かせられたという点において、筆者の教師としての力量が僅かながらも成長したということに関しては、嬉しく思う。ただ、そのところから、さらに深い読みに至らなかったということは、そもそも筆者自身の作品解釈に関する深さが不十分であったということの証左であり、この点においては大いに反省しておきたい。

これからの教師生活においても「生」や「死」をモチーフとした教材を通して、「死」というものと出会い、「死」を知らなかった自分自身を、そして今後の「生」を顧みるきっかけを子どもたちとともに作っていきたい。